

センセイの鞆

川上弘美

翻訳プロジェクト

月と電池

正式には松本春綱先生であるが、センセイ、とわたしは呼ぶ。「先生」でもなく、「せんせい」でもなく、カタカナで「センセイ」だ。高校で国語を教わった。担任ではなかったし、国語の授業を特に熱心に聞いたこともなかったから、センセイのことはさほど印象には残っていなかった。卒業してからはずからずいぶん長く会わなかった。数年前に駅前の一杯飲み屋で隣あわせて以来、ちよくちよく往来するようになった。センセイは背筋を反らせ気味にカウンターに座っていた。

「まぐろ納豆。蓮根のきんぴら。塩らっきょう」カウンターに座りざまにわたしが頼むのとほぼ同時に隣の背筋のご老体も、「塩らっきょ。きんぴら蓮根。まぐろ納豆」と頼んだ。趣味の似たひとだと眺めると、向こうも眺めてきた。どこかでこの顔は、と迷っているうちに、センセイの方から、「大町ッキコさんですね」と口を開いた。驚いて頷くと、「ときどきこの店でお見かけしているんですよ、キミのことは」センセイはつぶけた。

「はあ」曖昧に答え、わたしはセンセイをさらに眺めた。ていねいになでつけた白髪、折り目正しいワイシャツ、灰色のチョッキ。カウンターの上には一合徳利とさらしくじら一片の載った皿ともずくが僅かに残った鉢が置いてある。さても肴の趣味の合う老さかな体だと感心しているうちに、高校の教壇に立っていた姿をかすかに思い出した。センセイは必ず黒板拭きを持ちながら板書した。『春は曙。やうやう』などとチョークで書き、五分もたたない間にすぐさまぬぐってしまう。生徒に向かい講義する間も、黒板拭きを離さなかった。黒板拭きの帯は、センセイの筋ばった左手の甲にはりついているように見えた。

The Moon and the Battery

Although his official name is Dr. Harutsuna Matsumoto, I call him "Sensei". I call him "Sensei" in katakana, not "Sensei" or "Sensei". He taught Japanese in high school. Since he was not my homeroom teacher and I did not pay particular attention to his Japanese classes, he did not leave much of an impression on me. I did not see him for a long time after graduation. We met next to each other at a bar in front of the station a few years ago, and we have come to see each other frequently since. Sensei was sitting at the counter with a hunched back.

"Tuna and natto. Lotus root kinpira. Salted Rakkyo."

Almost at the same time as I asked for them, the old man with the straight back next to me said, "Salted Rakkyo. Salted radish, kinpira lotus root, tuna and natto."

I looked for the person with similar tastes, and he looked at me too. While I was wondering where I had seen this face before, Sensei said to me, "You must be Kiko Omachi, right?"

When I nodded in surprise, he continued, "I've seen you here from time to time. I answered vaguely and looked at him further. His neatly coiffed gray hair, his shirt folded neatly, his gray vest. On the counter was a sake bottle and a plate with a piece of dried whale and a bowl with a little bit of mozuku seaweed left in it. As I admired the elderly man's taste in snacks and drinks, I was reminded faintly of the way he used to teach in high school. He always wrote on the board while holding a blackboard cloth. He would write on the board while holding a blackboard wipe, "Haru wa Akebono. He would write *"Spring is Dawn. Ya-ya-ya-ya,"* with his chalk and immediately wipe it off in less than five minutes. He never took the blackboard cloth off the board while he was lecturing to the students. The strip of the blackboard cloth seemed to cling to the back of Senshi's sinewy left hand.

「はあ」

「はあ」

「いいえ」

「はあ」

「はあ」ビールを自分のコップにつぎながら、わたしは答えた。高校時代の先生だったことは思い出したが、名前が出てこなかった。よくも一生徒の名なぞ覚えているものだとはんぶん感心、はんぶん困惑しながら、ビールを干した。

「あのころ、キミはおさげにしていたでしょう」

「はあ」

「店に出入りするキミに見覚えがあったので」

「はあ」

「キミは今年三十八になるんですね」

「今年いっぱいはまだ三十七です」

「失敬、失敬」

「いいえ、いいえ。」

「名簿とアルバムを見て、確かめました」

「はあ」

「キミは顔が変わりませんね」

「センセイこそお変わりもなく」名前がわからないのをごまかすために「センセイ」と呼びかけたのだ。以来センセイはセンセイになった。その夜は日本酒を二人で五合ほど飲んだ。代金はセンセイが払った。次に同じ店で会って飲んだときには、わたしが勘定をした。三回目からは、勘定書もそれぞれ、払うのもそれぞれになった。以来そのやりかたが続いている。往来が途切れずに続いているのは、センセイもわたしもこういう気質だからだろう。肴の好みだけでない、人との間のとりかたも、似ているのに

ちがない。歳は三十と少し離れているが、同じ歳の友人よりもいっそのこと近く感じるのである。

センセイの家へは、何回か行ったことがある。飲み屋を出て、二軒目へ一緒にはしごすることもあるし、そのままそれぞれの家に帰ることもある。まれに三軒目四軒目までまわることがあり、その後はたいがいセンセイの家で最後の一杯をしめくくることになる。「ま、近くですから、お寄りなさい」と最初にセンセイが言ったときには少し身構えた。夫人は亡くなったと聞いていた。ひとり住まいの家の中まで入って行くことが少しばかり億劫だったが、酒を飲んでしまえば後を引く質でもあり、あがりこんだ。たち思ったよりも雑然としていた。塵ひとつないような部屋かと思っていたが、隅のくらがりのあたりに、もやもやと物が置いてある。玄関につづく古いソファのあるじゅうたん敷きの部屋は、しんとして何の気配もなかったが、次の八畳間には本やら原稿用紙やら新聞やらが散らばっていた。ちゃぶ台を広げ、部屋の隅に置いてある物の間から一升瓶をひっぱり出し、大きさの違う茶碗にセンセイは酒をなみなみとついだ。

「どうぞ召し上がれ」と言い残し、センセイはいったん台所に入った。八畳間は庭に向いていた。雨戸が一枚ぶんどけ開かれている。ガラス戸越しに、木々の枝がうすばんやりと浮かんで見えた。花の季節ではないので、何の木だかわからない。もともと植物にはあかるくない。鮭をほぐしたものと柿の種を盆に載せてきたセンセイに、「お庭の木は何ですか」と聞くと、「桜ばかりですよ」と答えた。

「全部桜ですか」

「ぜんぶがぜんぶ。妻が好きで」

「春はきれいでしょね」

「虫はつくし秋は枯れ葉がやたらに多いし冬は枝ばかりでさむざむしい」さほどいやそうにでもなく、センセイは言った。

「月が出てますね」空の高いところに、半月がかかっていた。朧月である。センセイは柿に種をひとつかみし、茶碗を傾けて酒をふくんだ。

"Oh."

"Oh."

"No."

"Mhmm," I answered as I filled my own beer glass. I remembered that he was my teacher in high school, but I could not remember his name. How could he remember the name of one of his students?

I drained my beer, half impressed, half puzzled.

"You were wearing pigtails back then," he said.

"Mhmm."

"I recognized you coming in and out of the store."

"Mhmm."

"You'll be thirty-eight this year, won't you?"

"I'll only be 37 at the end of the year."

"Oh, excuse me."

"No, it's ok."

"I looked in the directory and the photo albums to make sure."

"Huh."

"You haven't changed a bit."

"I called you "Sensei" to cover up the fact that I didn't know your name. Since then, "Sensei" has become "Sensei."

That night we drank about five shots of sake together. I paid the bill. The next time we met at the same restaurant, I paid the bill. From the third time, we each kept our own account and each paid our own bill. Since then, we have continued in this way. The reason why we have continued to come and go without interruption is probably because

we have the same temperament. We must have similar tastes not only in snacks and drinks, but also in the way we interact with others. Although we are a little over 30 years apart in age, we feel closer to each other than friends of the same age.

I have been to Sensei's house several times. Sometimes we go to a second bar together after leaving the bar, and sometimes we go back to our respective houses. On rare occasions, we would go to a third or fourth bar, and then usually end the evening at the sensei's house for the last round of drinks. When he first said, "Well, you're close by, come on by," I was a little defensive. I had heard that his wife had passed away. I was a little nervous about going inside the house where he lived alone, and knew that the drink would linger in my system, but I went in. The room was messier than I had expected. I thought it would be spotless, but there were a few things in the corner. The carpeted room with an old sofa leading to the entrance was quiet and empty, but in the next room, there were books, manuscript papers, and newspapers scattered about. He spread out the chabudai, pulled out a bottle of sake from among the objects in the corner of the room, and poured sake into different sized cups.

After saying, "Please enjoy your meal," he went into the kitchen. The eight-mat room faced the garden. Only one storm door was open. Through the glass door, I could see the branches of trees floating in the distance. It was not the flowering season, so I did not know what kind of tree it was. I have never been knowledgeable about plants. I asked him what trees he had in his garden, to which he replied, "They're all cherry trees."

"All of them are cherry trees?"

"All of them. My wife loved them."

"It must be beautiful in the spring."

"Insects are everywhere, and in the fall there are too many dead leaves, and in the winter it is too cold with all the branches."

"The moon is out."

There is a half-moon high in the sky. It was hazy. Sensei took a handful of persimmon seeds, tilted his bowl, and sipped sake.

「妻は、用意、だの準備、だののない人間でした」

「好きなものは好き、きれいなものはきれい」

「この柿の種、新潟のものです。辛くていい」 ぴりぴりとした辛味が、なるほど酒によく合った。黙ってしばらく柿の種をつまんだ。庭の木の梢の中で、はばたくものがあった。鳥がいるのだろうか。細い鳴き声も聞こえて、ひとしきり枝や葉を揺らす音もして、それからまた静まった。

「巢でもあるんですか」と聞いたが、答えがない。振り向くと、センセイは新聞に見入っていた。今日の新聞ではない、散らばっていた中からひょいと取ったものだろう。海外通信の、水着の女性の写真が掲載されているあたりを、熱心に読んでいる。わたしが居ることを忘れていた様子だった。

「センセイ」もう一度呼びかけたが、返事がない。集中している。

「センセイ」大きな声で呼んだ。センセイが顔を上げた。

「ツキコさん、ご覧になりますか」突然、聞く。返事をする間もなく、センセイは新聞を広げたまま畳に置き、襖を開け次の間に入っていった。古い簞笥から、いくつも出し、かかえて戻った。かかえているのは、小さな陶器だった。数回、次の間と八畳間をセンセイは往復した。

「これ、これですよ」 センセイは目を細め、そっと畳に陶器を並べた。把手と蓋と注ぎ口のついた器である。

「どうぞご覧ください」

「はあ」何だろう、これは。どこかで見たことのあるような、と思いながら、じっと見た。どれも粗い作りである。急須だろうか。それにしても小さい。「汽車土瓶ですよ」センセイが、言った。

「きしゃどびん？」

「駅弁と、この土瓶を買って、旅をしました。今ではお茶はプラスチックの器に入っていますが、昔はこの汽車土瓶に入って売っていた」並べられた汽車土瓶は、十以上もあった。飴色のものもあったし、色の浅いものもあった。かたちも、それぞれに違う。注ぎ口の大きいもの、把手が大ぶりなもの、蓋の小さいもの、胴の太っているもの。

「集めてらっしゃるんですか」聞くと、センセイは首を横にふった。

「昔、旅をしたときに駅弁といっしょに買ったものです」これは大学に入った年、信州に行ったときのもの。こちらは学校の夏休みに同僚と奈良に行く途中、駅に降りて連れのぶんも弁当を買い、ふたたび乗りこもうとした寸前に発車されてしまったときのもの。そちらは新婚旅行の行き道に小田原で買ったもの、割れないように新聞紙にくるんで服の間に入れ、旅行の間じゅう妻が持ち歩いた。昼に横 一列に並べられた汽車土瓶をひとつひとつ指さしながら、センセイは説明した。わたしは、はあ、はあ、と頷くばかりだった。

「こういうものを、蒐集するひとがいると聞かしてね」

「それでセンセイも」

「まさか。そんな酔狂なことはワタクシいたしません」もともとあったものを、並べてみるだけですよ、とセンセイは目を細めた。

「ワタクシはね、ものを捨てられないんですよ」センセイは言いながらもういちど次の間に行き、こんどは小さなビニール袋をいくつもかかえて戻ってきた。

「これはね」と言いながら結んだビニール袋の口をほどいた。中から取り出す。取り出されたのは、たくさんの電池だった。おのおのの電池の腹に、『ヒゲソリ』『掛時計』『ラジオ』『懐中デントウ』などと黒マジックで書いてある。単二の電池を手に取り、「これは伊勢湾台風のあった年の電池ですね。東京にもあながい大きな台風が来て、ひと夏で懐中電灯の電池を使いきった」

「こっちはカセットテープレコーダーを初めて買ったとき、単二が八本も必要で、それもすぐにくわれてしまう、ベートーベンの交響曲のカセットなんぞを何回もひっくりかえして聞いているうちに、数日で電池を使い切ってしまったものでした、八本全部は取っておけないんだが、うちの一本だけでも取っとうって、目をつぶって八本の中からえいや、と選んだ」などと説明する。せっせと自分のために働いてくれた電池があわれで捨てられない。今まで灯をともしたり音をならしたりモーターを動かしたりしてくれていた電池なのに、死んでしまったとたんに捨てるとは情のないことだ。

「そうじゃないですか、ツキコさん？」センセイは、わたしの顔をのぞきこんだ。何と答えていいのか、今宵十何回かめの「はあ」を発しながら、わたしは大小何十個 もあ

る電池のうちのひとつに指先で触れた。錆びて湿っている。腹に『カシオケイサンキ』と書いてある。「月が、ずいぶん傾いてきましたね」センセイは首をもたげて言った。月は腕の中から"抜け出て、くっきりと輝いている。

「汽車土瓶で飲んだお茶はおいしかったでしょうね」わたしがつぶやくと、「お茶淹れましょかね」と言いながらセンセイはついと手をのばした。一升瓶の置いてあったあたりをがさごそかきまわして茶筒を取り出した。飴色の汽車土瓶に無造作に茶の葉をいれ、ちゃぶ台の横に置いてあった古い魔法瓶の蓋を開け、湯を注いだ。

「この魔法瓶はね、生徒がくれました。アメリカ製の昔のものですが、昨日沸かして入れた湯がまだ熱い、たいしたもんです」酒を飲んでいた茶碗にそのままセンセイは茶を淹れ、それから魔法瓶を大事そうに撫でた。茶碗にまだ酒が残っていたらしく、茶は妙な味がした。急に酒がまわってきて、視界が愉快的感じになってきた。

「センセイ、お部屋の中拝見してもいいですか」と言うなり、センセイの答えも聞かずわたしは八畳間の隅に散らかっている物の中に踏みこんだ。反故がある。古いジッポのライターがある。錆の浮いた手鏡がある。革の大きな黒鞆、使いこんで敵のよったのが、三つある。三つとも同じ型だ。花鋏がある。手文庫がある。プラスチック製の黒い箱のようなものがある。目盛りと針がついている。

「これ、何ですか」目盛りのついた黒い箱を手にとって、わたしは聞いた。「どれどれ。ああそれね。それはテスターですよ」

テスター?と問い返すわたしの手からセンセイは黒い箱をそっと受け取り、物の間をがさごそかきまわした。黒と赤のコードを一本ずつ見つけると、テスターにつないだ。コードの先には端子がついている。「こうやって」言いながら、センセイは『ヒゲソリ』と書いてある電池の片側に赤のコードの端子を、もう片側に黒のコードの端子をくっつけた。

「ほら、ツキコさん、見てください」両手がふさがっているので、センセイは顎をつきだしてテスターの目盛りを示した。針がこまかくふるえている。端子を電池から離すと針は静止し、もういちどつけると、振れる。

「まだ電気が残っているんですね」センセイは静かに言った。

「モーターを動かすほどの力はないが、ほんの少し生きてる」いくつもある電池を、いちいちセンセイはテスターで測っていった。ほとんどの電池は端子をつけてもメーターの針を振れさせなかったが、まれに針を動かす電池がある。針が動くたびに、センセイは「お」と小さく声をあげた。

「ほそぼそ生きてるんですね」と言うと、センセイはかすかに頷いた。「そのうちに全部死に絶えるけれどねえ」のんびりした、遠い声である。

「簞笥の中で、まっとうするんですねえ」

「そうだねえ、そういうことになるかねえ」しばらくわたしたちは黙って月を眺めたりしていたが、やがて、もうちょっと酒飲みますか」とセンセイは元気な声で言って茶碗に酒を注いだ。

「あれれ、まだ茶が残ってたな」

「お茶割りですね」

『柳渡る夜の河白く河越えて煙の小野に』

「酒は割るもんじゃない」

「かまいませんよセンセイ」かまいませんかまいませんと言いながら、わたしはひといきに酒をあけた。センセイはちびちびとすすっている。月がこうこうと輝いている。突然センセイが唱えた。ろうろうとした声である。

「なんですか、そのお経のようなのは」とわたしが聞くと、センセイは憤然とした様子。」

「ツキコさんあなた国語の授業ちゃんと聞いてなかったですね」と言った。

「そんなの教わりませんよ」言い返すと、「伊良子清白でしょうが」とセンセイが答える。先生くさい口調だ。「イラコセイハクなんて聞いたこともない」言いながらわたしは一升瓶を持って勝手に自分の茶碗に酒を注いだ。「女のくせに手酌ですかキミは」センセイが叱る。

「古いですねセンセイは」と口答えすると、「古くて結構、結構毛だらけ」とつぶやきながらセンセイも自分の茶碗いっぱい酒を注いだ。

『河越えて煙の小野に かすかなる笛の音ありて旅人の胸に触れたり』

センセイは続きを唱えはじめる。目をつぶり、自分の声に聞き入るようにして唱えている。わたしはぼんやりと大小の電池を眺めた。電池は、淡い光のもとでしんと静まっていた。月がふたたび腫をまといはじめていた。

He took a bite of a persimmon seed, tipped back his teacup, and sipped his sake.

"My wife was an easygoing, prepared, and carefree person," he said.

"She liked what she liked and disliked what she disliked. These persimmon seeds are from Niigata, and they're spicy."

The spiciness of the persimmon seeds went well with the sake. I silently picked at the persimmon seeds for a while. I saw something fluttering in the treetops in the garden. I wondered if there were birds. I heard a thin chirping sound, and then the sound of branches and leaves shaking for a while, and then it was quiet again. I asked if there was a nest, but there was no answer. When I turned around, the sensei was looking at the newspaper. It was not today's newspaper, but something he had picked up from among the scattered papers. He was intently reading the section of the Foreign Correspondent's report that featured a picture of a woman in a bathing suit. He seemed to have forgotten that I was there.

I called out again, "Sensei," but there was no answer. He was focused.

I called out loudly, "Sensei!" He looked up.

"Do you see this, Ms. Tsukiko?" Before I could reply, he put the newspaper on the tatami mat, opened the sliding door, and went into the next room. He took out an old chest and returned with a number of items. He returned with a small piece of pottery in his hand. Several times, he went back and forth between the next room and the eight-mat room.

"This is it."

Sensei narrowed his eyes and gently arranged the pottery on the tatami mat. It is a vessel with a handle, lid, and spout. "Please take a look."

"Oh wow," I said. What is this? I stared at them, wondering where I had seen them before. They were all roughly made. They were all roughly made. They were too small to be kyusu.

"They are kisha-dobin," Sensei said.

"Kisha-dobin?"

"I bought an ekiben and an earthenware teapot for my trip. Nowadays tea comes in plastic containers, but in the old days it was sold in this train earthenware jar."

There were more than ten clay pots lined up. Some were candy-colored, others were light-colored. The shapes were also different from each other. Some had large spouts, some had large handles, some had small lids, and some had fat bodies.

"Are you collecting them?" I asked, and Sensei shook his head.

"I bought this one when I visited Shinshu in my first year of college. This one was from a summer vacation with a colleague in Nara, when we got off at a station, bought a boxed lunch for our companion, and were about to board the train again when it was pulled out. This one was bought in Odawara on the way to our honeymoon. It was wrapped in newspaper to prevent it from breaking and placed between our clothes," Sensei explained, pointing to the clay pots lined up side by side on the tatami mats. I just nodded my head.

"I heard that there are people who collect these things."

"And you, too?" I asked.

"No way, I wouldn't do something so crazy," he said, narrowing his eyes.

"I'm just going to put together what was there originally. I can't throw things away," he said, going to the next room again and returning with several small plastic bags. He took something out of the bags. What he took out were many batteries. On the belly of each battery was written, in black magic marker, the name of the battery, such as

"shaver," "wall clock," "radio," "pocket dentou," and so on. He picked up a single battery and said, "This is a battery from the year of the Ise Bay typhoon. Tokyo also had a big typhoon, and we ran out of batteries for our flashlights in just one summer."

"When I first bought a cassette tape recorder, it required eight AA batteries, and they wore out quickly. I couldn't keep all eight, but I decided to keep just one of them, so I closed my eyes and picked it out of the eight. I felt sorry for the batteries that had worked so hard for me, and I couldn't throw them away. They had been lighting our lights, making sounds, and running our motors, but to throw them away as soon as they die is a shameful thing. Isn't that right, Tsukiko-san?"

He looked into my face. For the umpteenth time this evening, I touched one of the dozens of batteries, large and small, with my fingertips, not knowing what to say. It was rusty and damp. On its belly was written "Casio Keisanki."

"The moon is getting very tilted," Sensei said, leaning his head back. The moon "slipped" out of his arms and shone clearly.

I murmured, "I bet the tea you drank in the train earthenware kettle was delicious, wasn't it? She rummaged around in the area where the bottle had been placed and pulled out a tea canister. He placed tea leaves carelessly in a candy-colored earthenware kettle, opened the lid of an old thermos that sat next to the tea table, and poured hot water into the kettle.

"I bet the tea you drank in the train earthenware kettle was delicious, wasn't it?" I murmured.

He rummaged around in the area where the bottle had been placed and pulled out a tea canister. He placed tea leaves carelessly in a candy-colored earthenware kettle, opened the lid of an old thermos that sat next to the tea table, and poured hot water into the kettle.

"This thermos was given to me by one of my students. It's an old American-made one, but it's still hot from the water I boiled it yesterday." The tea tasted strange, as if there was still sake in the cup. Suddenly, the liquor was flowing and my vision began to feel pleasant.

I stepped into a corner of the eight-mat room and looked around. There was a piece of antiquity. There was an old Zippo lighter. A rusty hand mirror. There were three large black leather bags, worn out and hostile. All three are of the same type. There are flower shears. There is a hand library. There is a black plastic box. It has a scale and a needle.

"What is this?" I asked, picking up the black box with the scale on it.

"Which one is it? Oh, that's it. That's a tester."

"A tester?" I asked, and he gently took the black box from my hand and rummaged through it. He found a black cord and a red cord, and connected them to the tester. At the end of each cord was a terminal.

"Like this," he said.

The red cord's terminal was attached to one end of the battery labeled "Beard sled," and the black cord's terminal to the other end.

"Tsukiko-san, please take a look." Since his hands were full, Sensei stuck out his chin and pointed at the scale on the tester. The needle was wagging. When I removed the terminal from the battery, the needle stood still, and when I put it back on, it shook.

"There's still some electricity left," he said quietly. "There's not enough power to run the motor, but there's still a little bit of life left in it."

The tester measured each of the many batteries. Most of the batteries did not move the needle on the meter when the terminals were attached, but there were a few that did move the needle. Whenever the needle moved, the tester would give a small, "Oh!"

I said, "You're still alive, aren't you?" and he nodded faintly.

"Sooner or later, all of them will die out," he said in a slow, distant voice.

"I guess you'll live out your life in a chest, won't you?"

"Yes, I suppose that's the way it's going to be."

For a while, we stood silently gazing at the moon, and then, as we were getting closer to the end of our conversation, he said, "Shall we drink some more? There's still some tea left, isn't there?"

"It's tea time."

"The willow crosses the river at night, the river is white, and the smoke is on the field."

"Sake is not to be mixed."

"It doesn't matter, sensei," I said. I opened the bottle of sake in one gulp. The moon was shining brightly. Suddenly, Sensei started chanting.

"What is that chanting?" I asked, and he looked indignant.

"Tsukiko-san, you didn't listen to the Japanese class properly, did you?"

"That's not what they taught us," I replied.

Sensei replied, "It's Irako Seihaku, no?"

He sounded like a teacher.

"I have never heard of Irako Seihaku," I said, taking the bottle and pouring it into my own cup.

"You're a woman and you pour sake by hand," the sensei scolded me.

"You're old-fashioned, aren't you?"

He poured sake into his own teacup, murmuring, "Old and full of hair, yes."

"Across the river, in the smoky fields, the faint sound of a whistle touches the traveler's heart."

The sensei began to chant the rest of the song. He closed his eyes and chanted as if listening to his own voice. I absentmindedly look at the batteries, large and small. The batteries were silent and still under the pale light. The moon was beginning to swell again.

ひよこ

八の日に立つ市に行きましょう、と誘ったのはセンセイだった。

「市が立つのは、八日と十八日と二十八日。今月は二十八日が日曜日ですから、キミはその日が好都合でしょう」そう言って、センセイはいつもの黒い鞆から手帳を取り出した。「二十八日ですか」答えながら、わたしは自分の手帳をゆっくりとめくったが、なに、予定など最初から無い。「その日なら、ええ、大丈夫です」もったいをつけて答えた。太い万年筆で、センセイは手帳の二十八日のところに『八の市 ツキコさん 正午南町バス停前』と書きこんだ。

達筆である。

正午に、お会いしましょう」センセイは鞆に手帳をしまいながら、言った。センセイと白日のもとで会うのは、珍しい。この薄暗い飲み屋で、今の季節ならば冷や奴、少し前の季節ならば湯豆腐を箸でくずしながら、ちびちびと酒など飲みながら隣合う、というのがいつものセンセイとわたしの会いかたである。会いかた、と言ったって、約束をするわけでもない、たまたま居合わせるだけである。数週間顔を見ないこともあるし、毎晩のように会うこともある。

「市って、何の市ですか」わたしは自分の杯に酒をつぎながら聞いた。市は市ですよ。市といえば、生活のものあれこれです。むろん」

センセイと生活のものあれこれと一緒に見に行くというのも妙な話だと思ったが、まあいいだろう。正午南町バス停前、とわたしも手帳に書きこんだ。

センセイはゆっくりと杯を干し、手酌でふたたび杯を満たした。一合徳利をほんのちよっと傾け、とくとくと音をたててつぐ。杯すれすれに徳利を傾けるのではなく、卓上に置いた杯よりもずいぶん高い場所に徳利を持ち、傾ける。酒は細い流れをつくって杯に吸い込まれるように落ちてゆく。一滴もこぼれない。うまいものである。わたしもいつかセンセイの真似をして徳利を高く持ち傾けてみたことがあったが、ほとんどがこぼれてしまった。もったいないことだった。以来、杯は左手にしっかり持ち徳利は右手で杯ぎりぎりまで近づけてつぐという無粋な手的に徹している。

そういえば、ツキコさんのする酌は色気がないね、と以前会社の同僚に言われたことがあった。色気という言葉も大時代だが、酌をするのが女であるというだけで色気を求

めることも、大時代である。驚いて同僚をまじまじと眺めた。ところがこの同僚、何を勘違いしたのか、店を出た後、くらがりに入って接吻をしかけてきたのである。こりゃいかん、と、ぐいぐい押しつけられてくる同僚の顔を両手ではっしと受け止め、押しや「こわがらないでいいんだよ」わたしの手をはがしてふたたび顔を近づけて来ながら、同僚はささやいた。どこまでも大時代である。吹き出しそうになるのをぐっところえた。どこまでの大時代である。吹き出しそうになるのをぐっところえた。「今日はお日柄も悪いし」口調も表情も大真面目に、言った。

「おひがら？」

「友引ですから。明日は赤口、庚寅ですし」

「あ？」

口をぽかんと開けている同僚をくらがり置き、さっと走って地下鉄の入り口を下った。階段を下りてからもしばらく走った。同僚がついて来る様子のないことを確かめてから、手洗いに入って用を足し、それからていねいに手を洗った。鏡の中の、少し髪を乱した自分の顔を見ながら、くすくすと笑った。センセイは酌を受けることを好まない。ビールも酒も、自分自身ででていねいにつぐ。

一度、ビールの最初の一杯をセンセイのコップについだことがある。ビール瓶をセンセイのコップへ傾けた瞬間、センセイは毛一筋、いや三筋ほどだろうか、みじろぎをした。しかし何も言わなかった。コップがいっぱいになると、センセイは静かにコップを持ちあげ、かんばい、と口の中で小さく言い、一息に飲み干した。全部飲んだところで、少しむせた。あわてて飲み干したのに違いない。一刻もはやく飲み干したかったのに違いない。次の一杯をつぎ足そうとしてビール瓶を持ち上げると、センセイは背筋をたてなおし、

「ああ、ありがとうございます。でもようござんす。ワタクシは手酌を好みますので」と言った。以来センセイに酌はしないことにしている。センセイが、わたしの杯に酌をしてくれることは、ときおりあるのだが。

バス停の前で待っていると、センセイが来た。十五分前にわたしが着いて、十分前にた先生が着いた。よく晴れた日曜日だった。「あんなに櫓がざわざわしてますな」センセイは言って、バス停の横手にある数本の棒を眺め上げた。なるほど、濃い緑に繁った櫓の枝がしなっている。風はさほど強く感じられないのに、空高くにある櫓の梢は、大きく揺れているのである。暑い夏の日だったが「シャツ、お似合いですね」

と言うと、「いや、そんなことも」 センセイは早口で答え、足を速めた。しばらく早足で二人して 無言のまま歩いたが、じきにセンセイは歩調をゆるめ、「腹が減りませんか」と聞いた。

「それよりも、ちょっと息が切れました」 答えると、センセイは笑い、「ツキコさんがへんなこと言うからいけません」と言った。「へんなことなんか言ってませんよ。センセイ、お洒落なんですね」というわたしの言葉には答えず、センセイはすぐそばにある弁当屋に入って行った。「豚キムチ弁当スペシャル一つね」とセンセイは店の女性に言い、わたしに向き直った。

「ツキコさんは？」 センセイが目でうながす。メニューが多すぎて、なにがなんだかわからない。ビビンバ目玉焼き入り、というのに一瞬ころひかれたが、入っているのが卵黄ではなく目玉焼きなのが気に入らなかった。一度迷い始めると、かぎりなく優柔不断になる。

「わたしも豚キムチ弁当を」 迷いに迷ったすえ、結局センセイと同じものになってしまった。店の隅にあるベンチに、センセイと並んで腰かけて弁当のできあがりを待った。

「センセイ、注文しなれてますね」と言う、センセイは頷いた。」

「センセイ、注文しなれてますね」と言う、センセイは頷いた。」

「ひとり住まいですからね。ツキコさんは料理、なさいますか」

「恋人がいるときはするんですがねえ」 答えると、センセイは真面目に頷いた。」

「それは道理だ。ワタクシも恋人の一人や二人、つくればいいのでしょうかね」

「二人もいると、たいへんでしょう」

「二人が、まあ限度でしょうね」

埒もないことを言いあっているうちに、弁当ができあがった。大ききの違う二つの弁当を、店の人が手提げのポリ袋に入れてくれた。大きさが違いますね、同じもの頼んだのに、とセンセイに耳打ちすると、だってあなた、スペシャルじゃなくて普通の方頼んだじゃありませんか、とセンセイも小声で、答えた。外に出ると、少し風が強くなっていた。

センセイは弁当の入ったポリ袋を右手に提げ、左手でパナマ帽を押さえた。道沿いにぱらぱらと露店があらわれはじめた。地下足袋ばかり売っている露店がある。折り

たたみ傘を売っている露店がある。古着の露店がある。古本と新しい本を取り混ぜて売っている露店がある。そのうちに、道の両側を露店がぎっしり埋めるようになってきた。

「ここいらはね、四十年前の台風の大水のとくに、すっかり水にやられてね」
「四十年前」

「ずいぶんと人も死んだ」

そのころから市は立っていたのですよ、とセンセイは説明した。大水の翌年は規模が縮小されたが、その翌年からはふたたび大がかりな市が月に三回立つようになった。市は年々盛んになり、今では寺町バス停から次の川筋西バス停までの間の道は、八の日以外の日でもほとんどの露店が開いている。「こっち、こっち」と言いながらセンセイは、道からはずれた小さな公園に踏み入った。ひ人けのない公園である。表の道には人があふれているのに、一步入ったここはしんと静まりかえっている。公園の入り口にある自動販売機で、センセイは玄米茶を二本買った。

ベンチに並び、弁当のふたを開けた。開けたとたんに、キムチの匂いが立った。

「センセイのは、スペシャルなんですね」

「スペシャルですとも」

「どう違うんでしょう、普通のと」

二人で頭を並べ、二つの弁当をじっくりと眺めた。

「さしたる 違いはありませんな」センセイは愉快そうに言った。

玄米茶をゆっくりと飲んだ。風はあるが、真夏のこととて水分がなつかしい。冷たい玄米茶が喉を湿らせながら落ちてゆく。

「ツキコさん、うまそうな食べ方してますな」豚キムチの残りの汁にご飯をまぶして食べているわたしを見ながら、センセイはうらやましそうに言った。センセイはすでに食べ終えている。

「行儀悪でごめんなさい」

「たしかに行儀はなっとらんです。でもうまそうだ」空の弁当箱にふたをして、輪ゴムをかけなおしながら、センセイは繰り返した。公園には樺と桜が交互に植えられていた。古い公園なのだろう、樺も桜も丈高く雑貨育っている。類を売る一角を過ぎると、食料品をあつかう露店が多くなった。豆ばかり売っている露店。

It was Sensei who invited me to go to the market on the 8th of August. The market is held on the 8th, 18th, and 28th.

"The market is held on the 8th, 18th, and 28th, and the 28th is a Sunday this month. That day will be convenient for you." Saying this, he took out a notebook from his usual black bag.

"The 28th?" I answered as I slowly flipped through my notebook. I had no plans at all.

"That day, yes, I'm fine," I answered with a hint of sophistication. With a thick fountain pen, he wrote in his notebook on the 28th, *"8th city, Tsukiko-san, noon, in front of the bus stop in Minamimachi."*

His writing was masterful.

"I'll see you at noon," Sensei said as he tucked his notebook into his bag.

It was rare for me to meet him in broad daylight. In this dimly lit bar, we would usually meet next to each other over sake or other drinks, eating chilled tofu if it was the current season or yudofu if it was a little earlier in the year. We don't make any promises, we just happen to be together. Sometimes we don't see each other for weeks, and sometimes we see each other every night.

"What kind of city is it?" I asked him as I filled my cup.

"A city is a city. A city filled with things to do with life, of course," he said.

I thought it was strange that he and I would be going together to look at things to do with life, but I guessed it was ok. I wrote in my notebook, "In front of the Minamimachi bus stop at noon."

Sensei slowly drained his drink and filled it again with his own cup. He tilted the sake cup slightly and poured it down with a clinking sound. Instead of tilting the sake cup just above the cup, he held it much higher than the cup on the table and tilted it. The sake fell into the cup in a thin stream. Not a drop spills. It was delicious. I once tried to imitate him by holding the sake cup high and tilting it, but most of the sake spilled out. It was a waste. Since then, I have been holding the cup firmly in my left hand and pouring the sake with my right hand as close to the cup as possible, which is a very tactless way of drinking.

I was once told by a colleague that my way of drinking was not sexy. The word "sex appeal" wasn't of the times, but the demand for sex appeal simply because the person pouring the sake is a woman was. I looked at my colleague with surprise. However, this colleague, who had misunderstood what I was doing, entered the bar and kissed me after we left the restaurant. I thought to myself, "Oh no, this is not good." I caught the colleague's face with both hands as he pressed his face against mine and pushed him away. What era did he think it was? I suppressed the urge to burst out into laughter. How big of an era is this? I tried to hold back the urge to burst out. Seriously, what era did he think it was?

"It's a bad day," I said, my tone and expression serious.

"This day?" he asked.

"Because it's a Tomibiki. Tomorrow is also Shakkou and Kanoetora."

"Huh?"

I left my open-mouthed colleague in the dark and quickly ran down the subway entrance. After descending the stairs, I ran for a while. After making sure my colleague wasn't following me, I went into the washroom to do my business, then carefully washed my hands. I looked at my slightly disheveled face in the mirror and chuckled. Sensei doesn't like to be served. He carefully pours his own beer and sake.

Once, I poured the first of my beers into Sensei's glass. As soon as I tipped the beer bottle into his cup, he flinched a hair, or maybe three hairs, but said nothing. When the glass was full, he quietly lifted it, said "Kanpai," and drank it all in one gulp. When he

had drunk all of it, he choked a little. He must have wanted to finish it as soon as possible. When I lifted the beer bottle to refill it, he straightened his back and said, "Oh, thank you very much, but I prefer to pour by myself." Ever since then, I have decided not to pour for Sensei. Although he has occasionally offered to pour a glass of wine into my cup.

As I was waiting in front of the bus stop, he arrived. I arrived fifteen minutes before him, and he arrived ten minutes before me. It was a beautiful sunny Sunday.

"The buses are so crowded," Sensei said, looking up at the few bars beside the bus stop. The wind was not so strong, but the dark green branches of the zelkova tree tops high in the sky were swaying. It was a hot summer day. I said, "Your shirt looks good on you," and he said, "No, it doesn't." Sensei answered quickly and quickened his pace. We walked in silence for a while, but soon he slowed his pace and asked, "Are you hungry?"

"More than that, I'm a little out of breath," I answered.

"You shouldn't say such strange things," he said with a laugh.

"I didn't say anything strange. Sensei, you're so stylish," I said. Without answering my words, he went into a nearby bento shop.

"I'll have the pork and kimchi bento special," he said to the woman in the store and then he turned to me. "What about you?" he said with his eyes. There were so many items on the menu, I had no idea what was what. I was momentarily attracted to the "Bibimbap with fried egg," but I didn't like the fact that it contained a fried egg instead of a yolk. Once I start hesitating, I become indecisive.

After much hesitation, I said, "I'd like a pork kimchi bento too." I ended up with the same bento as Sensei. I sat down on a bench in the corner of the restaurant and waited for my bento to be ready.

I said, "You're used to ordering," to which he nodded.

"I live alone. Do you cook, Ms. Tsukiko?"

"I do when I have a lover," I answered, and he nodded seriously.

"That makes sense. I guess it might be a good idea for me to have a lover or two."

"Two lovers must be a lot of work."

"Two is the limit, I suppose."

While we were arguing about the most absurd things, the lunch boxes were ready. The shopkeeper had put two differently sized lunches into a plastic bag. I whispered to Sensei, "They're to different sizes even though I ordered the same thing."

He answered, "You ordered the regular one, not the special one."

When I went outside, the wind had picked up a little.

He held the plastic bag containing the lunch box in his right hand and held his Panama hat with his left. Stalls began to appear along the street. One stall sold only Tabi Shoes. Some were selling folding umbrellas. There was a stall selling used clothing. There were stalls selling a mixture of old and new books. Before long, both sides of the street were filled with stalls.

"The area was completely flooded by a typhoon 40 years ago," he said.

"Forty years ago?"

"A lot of people died."

The market had been running since that time, Sensei explained. The year after the flood, the size of the market was scaled down, but from the following year on, a large-scale market was held three times a month. The market has grown more and more popular each year, and now most of the stalls along the road between the Teramachi bus stop and the next bus stop, Kawasuji-nishi, are open on days other than the 8th day of the month.

"Over here," Sensei said as he stepped into a small park off the road. It was a deserted park. While the main street was crowded with people, the park was quiet and still. From a vending machine at the entrance of the park, Sensei bought two bottles of brown rice tea. We lined up on a bench and opened the lids of our lunch boxes. As soon as I opened it, I smelled kimchi.

"I see that yours is a special," he said.

"Of course, it's a special."

"How is it different from the regular one?"

We both put our heads together and looked at the two bento boxes carefully.

"There's not much difference," he said pleasantly.

We sipped our tea slowly. There was a breeze, but the moisture was welcome, especially in the middle of summer. The cold tea fell down his throat, moistening it as he sipped it.

"Tsukiko-san, you seem to be enjoying your food," Sensei said enviously as he watched me eating rice covered with the leftover pork kimchi broth. He had already finished his meal.

"I'm sorry for my bad manners."

"Your manners aren't bad, it just looks good," he said as he put the lid back on the empty lunch box and reattached a rubber band around the lid. In the park, birch and cherry trees were planted alternately. Both zelkova and cherry trees were growing tall and coarse. After passing a corner selling sesame seeds, many stalls selling foodstuffs began to appear. A stall selling only beans.